

Student Intern Workshop Report 2020

インターン・ワークショップ・レポート

この冊子は石塚計画デザイン事務所のインターン生が作成したレポートをまとめたものです

準備期間は半年！石デ初のオンライン・オフライン同時開催ワークショップ！ あつ祭 学びと出会いの詰め合わせ「川崎の“市民館”を考える」フォーラム

石デ、初の試み

8月23日、市民館がもっと地域の身近な存在となるよう、そのあり方を考えるフォーラムが、溝の口駅近くの高津市民館で開催されました。

コロナ禍でイレギュラーなことが多く、石塚計画デザイン事務所（以下石デ）でも初の試みとなるYouTubeやZoomも活用したワークショップ。川崎市の職員、お話いただくゲスト、市民、イベント進行役の石デの職員、オンラインでつなげるための技術担当の方々が参加。私たちインターン生は写真撮影やレポート作成、タイピング記録などを担当し、私は写真撮影を託されました。「まちづくり」という仕事現場を実際に見るのは初めてだったので、その視点から新しい発見だと思ったものにシャッターを切っていました。

高津市民館の入口はカラフルな三角フラッグや提灯で装飾され、参加者は祭りのはっぴを着たスタッフに迎えられ、ワクワクする仕掛けがいっぱい。パンフレットもポップなデザインがほどこされていて、こういった雰囲気づくりに力を惜しまないのが石デならでは！と思いました。

いよいよイベント開始！

第一部の「インスピレーショントーク」では、先進的な図書館での取り組みをされている札幌市中央図書館の浅野隆夫さん、学びの資源を維持し活用していく活動をされている埼玉大学教育学部教授の安藤聡彦さんのお二方から「これからの公共施設のカタチ」についてお話を伺いました。

私が特に驚いたのは札幌中央図書館！市民図書館といえば新

聞を読むおじさんの場所という印象だったのですが、そこは程よくおしゃれで老若男女を受け入れる空間でした。

第二部は、「ワールドカフェ」。会場の参加者を6つのグループに分けて「話を聞いて思ったこと」「身近な学びの場とは？」「どんな市民館なら行きたいか？」について意見交換しました。ひとつのトピックに割けるのは15分という短い時間でしたが、各グループのファシリテーターが受け止め、最後は全体に向けてグループで話し合ったことを発表しました。

ここでは、ファシリテーターによって進行の仕方や話のまとめ方、発表の仕方が違っていった点に興味を持ちました。椅子に座る市民と合わせて目線を低くして話を聞く方、話を聞きながら模造紙に絵や矢印を書く方、またZoomで発表される方の中には、まとめた内容をご自身の背景にした方も。発表されたときには、会場で「おお」と声が上がりました。

少しずつ見えてきた、新たな市民館の“カタチ”

初めての試みということもあり、リハーサルでは回線が繋がらないなどのハプニングもありました。それでも一人ひとりが「より多くの意見を出しあおう」という意識を持っているからこそその大成功だったように思います。

まちづくりに欠かせないのは、そこに住む人達の生の意見。その意見を取り入れる、一番最初のステップを見ることが出来ました。

参加者からは「ふらっと立ち寄れて交流ができる市民館になってほしい」という意見が多くありました。市民のこの声がどのように反映されていくのか、とても楽しみです！（小澤）



たくさんの熱い想いが、オフライン・オンラインで白熱！ ワークショップ 2.0：新しい交流のかたち

【初】オンライン・オフラインの同時開催

川崎市の市民館の未来を考える市民参加型のワークショップが開催されました。川崎市では、これまでに市民館のあり方を考えるワークショップを重ねてきましたが、今回はオフライン・オンラインの同時開催。会場の高津市民館にいたオフライン参加者と、自宅にいるオンライン参加者をzoomで繋ぐ初めての試みです。

私はパソコンからオンラインで参加しました。第一部のテーマはインスピレーショントーク。ゲストに札幌市図書・情報館の新たなかたちを模索した浅野隆夫さん、社会教育施設に詳しい埼玉大学教育学部教授の安藤聡彦さんを招いて講演が行われ、公共施設のもつ可能性について参加者にインスピレーションをもたらしました。zoom越しに、参加者の皆さんが話しながら聞いていらっしゃる様子がとても印象的でした。参加している場所は遠くても、心の距離はそう遠くありません！

オンラインだからこそ生まれる交流

第二部の「ワールドカフェ」は、参加者同士の交流の時間です。オンライン参加者はzoomのブレイクアウトルーム機能を使用し、5~6人のグループで意見交換をしました。画面越しに印象的だったのは、参加者の層が多様であること。退職後、市民活動に力を入れていらっしゃるご高齢の方が中心で、働く若い世代の姿も見られました。オンライン開催だからこそ自宅から簡単に参加でき、今まで市民活動への参加や市民館を利用する機

会のなかった市民を交えた交流が生まれたように思います。公共施設である市民館は、子供から働く世代、高齢者まで様々な世代の人が一度に交流できる数少ない場所。市民館自体が、あるいは市民館を題材にしたこのワークショップのような機会が、多様な価値観を持つ人たちの交流の場となる可能性を感じました。

zoom 越しで共有 市民の熱い想い

zoom上での交流ということで、空気が硬くなってしまうのではないかと考えていましたが、心配は無用でした。前半のフォーラムの内容を踏まえ、市民からは「集団でなく、個人でも利用しやすい」「距離的にも、心理的にもっと身近な」「働く世代にも利用のハードルが低い」「子供たちの居場所となる」市民館にして欲しい、といった想いが寄せられました。市民館をよく利用する市民、遠い存在に感じ利用に踏み切れなかった市民の双方の生の想いが、パソコンの画面越しでも熱を持って語られました。

街に、オンラインに、市民館から飛び出せ！

オンライン・オフライン同時開催のワークショップを通し、市民館を飛び出したオンラインだからこそ生まれる多様な層の交流があること、市民館の中の対面の交流だからこそ得られる幸福感もあることを実感しました。これからの市民館のあり方を考えたとき、新しいかたちとして「街中に」「オンラインに」飛び出す市民館を創造できたら、とてもワクワクします。ますます多様な層の市民交流が生まれ、多様な価値観に触れることができる場になれば素敵ですね。（溝口）



● インタビューライター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 2年 溝口 開人

● 開催日時：2020年8月23日 ● 実施場所：高津市民館ホール・Zoom ● 参加者：市内の活動団体・関心のある市民、この機会に関心を持つ市民

コロナ禍でも挑戦を諦めない！ NPO 法人運営やクラファンのコツを学ぼう！ カワサキコネクト～ミライのために、イマできること～

なかなか大変、コロナ禍の中の活動

2020 年 12 月、新しい生活様式が求められている昨今、NPO 法人の活動を継続させたり、支援を得るための活用法を探るワークショップが開催されました。会場の川崎市総合自治会館ホールには、NPO 法人関係者が多く集まりました。

石塚計画デザイン事務所（以下石デ）は、グラフィックレコーディングや映像関係、写真記録の大きく 3 つを担当。来場者にはマスクの着用を促すなど、感染症対策をしっかりとった会場はほぼ満席に。参加者の関心の高さが伺えるようでした。

「オンライン」「オフライン」でできること

最初に、子育て世代の方に心豊かなくらしを提案することを目的として活動している NPO 法人「みどりなくらし」理事長の堀由夏さんから、今年の活動紹介をしていただきました。コロナ禍に入ってから YouTube や Zoom を使ったイベントなどを始め、試行錯誤の中でも高評価だったとのこと。「半歩でも前に進むことが大事」という言葉が印象的でした。

続いて、高齢者や障害者、その家族をお互いに支え合い、地域に住む誰にも優しいまちづくりのネットワークを目指して活動している、NPO 法人「すずの会」理事長の鈴木恵子さん。コロナ禍でデジタル化が進む中でも、「アナログで乗り切った」そうです。3 月中に 140 枚ものマスクを作って戸別配布、安否確認・悩み相談のためにかけた電話はなんと 627 回！これには会場もどよめきました。「できないことが多い中でもできることを探して、やる」という鈴木さんのお話を、参加者もメモをしながら聞いていました。

濃度の濃い 80 分

コロナ禍で急速に浸透したクラウドファンディング（以下、クラファン）。会場の熱気から、最も関心を寄せられているテーマのようでした。事業運営企画のコンサルティングを行う鎌倉幸子さんに、クラファンの基礎知識、実際に行う際の注意点を教えていただき、本番を想定したワークもありました。普段 5 時間かけて行うセミナーを、なんと 80 分に集約。この短い時間に、これからクラファンに挑戦する人を励ます名言がいくつも飛び出し、あっという間に感じられました。

石デの腕の見せどころ！ グラフィックレコーディング！

石デの千葉さんは、登壇者の話を聞きつつ、グラフィックレコーディングを行い、会場の司会もするという一人三役をこなしていました。また今回、参加者にフルーツや花の形の付箋にこれからのアクションについて書いてもらい、木のイラストの模造紙に貼ってもらいました。こうすることで、「木を完成させるために意見を書こう・ちゃんと参加しよう」と参加者に自ずと意識させる、ユーモアのある工夫も。ワークショップ終了後も、模造紙の前に参加者が集まり、感嘆の声が上がっていました。

今回のイベントを受けて、これから川崎ではどのような活動が生まれるのでしょうか？ 川崎市のクラウドファンディングサイト「かわファン」にも、期待が高まります！（小澤）



コロナ禍でのコミュニティ活動を考えよう

まちのひろばフェス 2020 これからのコミュニティ活動を考える～ with コロナ、after コロナ～

対面（リアル）とオンラインの同時開催

多様なつながりを育む地域の居場所である「まちのひろば」について知り、これからのコミュニティ活動を考える「まちのひろばフェス 2020」。2020 年は新型コロナウイルスの影響で対面によるつながりづくりが難しくなり、多くの方が戸惑いを感じていると思います。しかし、そんな状況下でも新しい手段を試し、コミュニティ活動を続けている方々がいます。

今回の「まちのひろばフェス」では、そんな方々のお話を聞き、新しい生活様式に沿ったつながり方を一緒に考えていくことになりました。今回は、3密を避けるために、対面（リアル）とオンラインの同時開催という新しい形で行われました。114名の参加者のうち、来場者は全体の3割、オンラインでの参加者は7割（YouTube 含む）に。

コロナ禍でもコミュニティ活動はできる！

第一部では、NPO・企業・サークル運営者等へのセミナー・コンサルティングを多数提供する NPO 法人 CR ファクトリーの呉哲煥（ご・てつあき）さんによる講演会が行われました。

コロナ禍の折、リアルなイベントやミーティングができない、高齢者の感染に気をつける必要がある、IT・オンラインの得意・苦手の差といった問題が起きています。呉さんは市民活動の場での戸惑いの声を聞かなかで、形を変えてもコミュニケーションを続けること、自分たちの根本を見つめ直すこと、中長期的視野に立つことが重要だと考えているそうです。

参加者の方々からは、「悶々と悩む中で今回のイベントでは少し光が見えた」「新しいやり方にチャレンジしていく必要性を感じた」などの感想をいただきました。また、オンラインによって市民活動が進化することもわかり、僕自身も、この状況を前向きにとらえることができました。

オンラインによるコミュニティ活動の新しい形

第二部では、「Vege&ArtFes」の中村ふみよさん、大規模マンションで居住者が一体となって防災に取り組む「オーベルグランディオ川崎自治会」、まちのひろばづくりに取り組む「川崎市職員 PJ チーム」のメンバーも加わってトークセッションを開催。

中村さんは、川崎の農家やママ起業家、商店と一緒にワークショップ、川崎野菜の販売等の活動を行なっています。お話を聞いて、マルシェやマンションでの活動、まちのひろばづくりなど、コロナ禍でもオンラインを活用することで様々な活動ができることがわかりました。どの方々も新しい活動の形を作り上げている様子。オンラインという慣れない環境で、手探りながらも活動を続けていきたいという熱い思いが感じられました。フェス終了後にはオンライン体験会も行われ、オンラインでの活動の手段を学べる場にもなりました。また、今回のフェスは YouTube にアーカイブが残っており、参加できなかった方も見るできるようになっています。

このフェスを通し、コロナ禍での活動に悩んでいた参加者の方にとって「何かできることがある！」という気持ちが高まる場になったのではないかと思います。（浅野）



●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 4 年 浅野 秀矢

●開催日時：2020 年 11 月 1 日 ●実施場所：川崎市総合自治会館 大会議室 ●参加者：地域コミュニティや市のコミュニティ施策に関心のある方

授業から飛び出せ！高校生のアイデアでまちづくり通信を発行しよう

元石川高校アントレプレナーシップ スピニアウト企画

自らの手で、通信をかたちに！

神奈川県横浜市の元石川高校で、現役高校生の皆さんと「次世代郊外まちづくり通信」の制作に向けたワークショップが開催されました。元石川高校では、企業家精神を育む「アントレプレナーシップ」という授業の一環で、「次世代郊外まちづくり通信」を発行する横浜市・東急株式会社とタッグを組み、高校生に「手に取ってもらえる」「まちづくりに参加してもらえる」通信づくりに取り組んできました。

授業では高校生が考案した通信を大人たちに提案することがゴールでしたが、今年度で2回目の開催となるスピニアウト企画は、実際に通信を発行しよう！というもの。アントレ受講者のうち、実際に通信をかたちにしたいという熱意を持った生徒たちが集いました。

通信を発行するまでには数々の行程がありますが、今年は感染症の影響により限られた時間で進めなければなりません。今回のWSでは、完成に向けて大きくステップアップするために、通信のデザインや内容のアイデアを出し合い、皆で完成イメージを共有しました。

高校生の目を惹くには？リアル世代から湧き出るアイデア

通信をつくる上で大切なのは、読者をイメージすること。「ターゲットとなる高校生に読んでもらうには」「読んだ高校生にどう変わって欲しいか」を想像しながら、通信のデザインや内容のアイデアを出していきます。「高校生が興味のある昭和レトロをデザインの基調とする」「マンガ形式で内容を展開す

る」「学校から駅までの道にあるお店や、たまプラの歴史を紹介したい」などのアイデアが生まれました。

私が驚いたのは、高校生のアイデアの豊富さと具体性。次から次へとアイデアが飛び出てきます。そして、そのそれぞれがとても具体的！「高校生に親しみを持ってもらいつつ、お洒落なデザインにしたい。そのために丸みを帯びたフォントや手書きの文字を取り入れる、同系色の色で揃える」といったアイデアも出されました。

侮るなかれ、高校生のデザイン力

アイデアを出し合って通信の完成イメージを共有したのは、表紙や裏面のデザインを担当する「デザインチーム」、内容の取材や文章を担当する「コンテンツチーム」に分かれ、具体化に向けて始動しました。大人が介入せずとも、生徒主体でどんどん話が進んでいきます。デザインチームの生徒は、今までに目にした雑誌やチラシから学んだデザイン要素を意識しつつ、ターゲットとなる高校生の目を惹く表紙デザインを試行錯誤。親しみやすくも洗練されたデザインにしようとする高校生のこだわりを感じました。

大人が高校生向けにデザインしようするとポップになりがちな印象がありますが、参加生徒たちが求めているのはもっとスタイリッシュなデザインでした。高校生の趣向を大人が決めつけてはいけません！

今回のWSを通してイメージがグッと具体化したまちづくり通信。高校生が高校生に向けてつくる通信がどんなかたちになるのか、楽しみでなりません。（溝口）



インターン・ワークショップ・レポート 2020
Student Intern Workshop Report

2021 年 3 月 31 日 発行

株式会社 石塚計画デザイン事務所
<http://www.community-design.jp/>

Intern Reporter

浅野秀矢・小澤萌子・溝口開人

Special Thanks

鈴木徳子 (Writer / Editor)

Sapporo office

〒060-0002

札幌市中央区北 2 条西 2 丁目 26 番地 道特会館 4F

Tel:011-251-7573 Fax:011-251-7574

Tokyo office

〒150-0045

東京都渋谷区神泉町 20-24 Bricks 7F

TEL:03-3461-5120 FAX:03-3461-5144

